2004.10.29

EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

EDO-TOMO えど友

NO.22

平成16年 2004 11−12

ホームページ〈えど友Web〉
http://www.edo-tomo.jp/

江戸東京博物館友の会会報

えど友サークル いよいよスタート

——まず２つのサークルから——

具体化へ向け、発足準備会開かれる

前号で参加を募りました２つの「えど友サークル」につきましては、予想を超える多くの方々から応募がありました。

これを受けて担当の総務部会主催で、サークル発足へ向けての初会合「サークル発足準備会」が９月２４日(金)に江戸東京博物館会議室で開かれました。

当日は「江戸三十六見付を巡る会」（仮称）に応募された２２名、「江戸の理解を深める会」（仮称）に応募された９名の方々の中から合せて１７名が出席され、熱心な会合が持たれました。

準備会は、まず総務部会長の岩松精さんから主旨説明および「えど友サークル」設置のガイドラインや、活動のフロー、手続きなどについて説明がありました。

続いて、両サークルの発起人（世話人）である小笠原淑夫さんと野村和正さんから、今後の進め方などについての説明がありました。

会議室の手配、連絡、コピーなど事務的なことは当面総務部会でお手伝いするとの発言もありました。

また、出席の皆さんから質問や希望が述べられ、各サークルとも近く第１回の会合を開くことを決め散会しました。別項のように新たなサークル設立の申し出もあり、今後の展開が大いに期待されます。

［取材］文・写真　広報部会・松原良

●会員更新手続きのお願い●

友の会は会員の皆様によって支えられています。
会員資格は1年です。まもなく有効期限の終了を迎える方には「継続手続きの書類」が郵送されますので、お早めに手続きをお願いいたします。
■更新しませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

—目　次—

◆友の会セミナー
第18回「大田道灌と江戸城」……2
第19回「江戸と上方」……3
第20回「伊能家から見た伊能忠敬」……4
◆見学会「常設展を見る～大江戸歌舞伎と能」…5
◆えど友プラザ ……6
森川和夫・小林玖仁彦・桐井聡男
☆江戸博クリップ　落合則子……5
☆源内さんの江戸博さんぽ……7
☆えど友サークルメンバー募集…8
☆名店めぐり〈14〉
野菜菓子の「梅鉢屋」……9
☆会議・会合日誌……9
●事業部会だより……10
☆会員優待・企画展予告……12

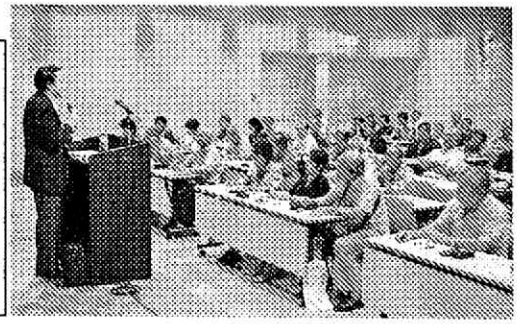
■会報〈えど友〉は、会員の皆様と友の会を結ぶ情報誌です。ご意見・ご希望・ご投稿など、ぜひお気軽にお寄せください。
■友の会のホームページ<えど友>Web版が再開しました。アドレスはhttp://www.edo-tomo.jp/

第18回江戸東京博物館友の会セミナー（2004/8/13）

太田道灌と江戸城

―飢饉と戦乱の関東を駆ける―

講師：舘鼻誠さん（専修大学文学部講師）



道灌の生い立ち

道灌が生まれたのは、永享4年(1432)のこと。9歳から11歳まで鎌倉の寺に預けられますが、大変な神童ぶりで評判でした。

父親の道真はある時「障子はまっすぐだからきちんと立ち、役に立つ。曲がっていれば倒れてしまう」と正直の大切さを諭しました。

すると道灌は「屏風（びょうぶ）は曲がっていなければ倒れてしまう。何でもまっすぐがよいとは限らない」と言ったという話があります。道灌の父親は、名門上杉家の一族、扇谷(おうぎがやつ)上杉家の家宰(筆頭家臣)でした。

鎌倉公方と関東管領の対立

関東は当時、室町幕府の直接支配ではなく、鎌倉府にゆだねられていました。その長官を鎌倉公方(くぼう)といい、補佐する役職が関東管領の山内上杉家です。

応仁の乱より30年も前の永享10年(1438)、鎌倉公方の足利持氏が管領上杉を討とうと兵を挙げ、逆に上杉軍に滅されます。

これを皮切りに、鎌倉公方復活の動きと上杉の対抗が繰り返され、関東は戦乱の続く時代に入ります。

そこで文安4年(1447)、室町幕府は持氏の息子万寿丸王(足利成氏・しげうじ)を鎌倉公方にして、いったん事態を収めます。

３０年も続いた享徳の大乱

この鎌倉公方成氏が享徳3年(1454)、上杉をつぶす行動に出ます。翌年、成氏と激突した上杉軍は、当主、一族、重臣を失う壊滅的な打撃を受けて敗走。勝った成氏は鎌倉から古河に拠点を移し、以後、「古河公方」と呼ばれます。

このとき室町幕府は、山内上杉房顕(ふさあき)を管領として京都から派遣、成氏討伐の総大将に任じます。こうして関東は、大小の領主を巻き込み、幕府・上杉方と古河公方方に勢力を二分、30年間にわたる戦乱となります。

一方、長禄2年(1458)室町幕府は、鎌倉公方不在として将軍義政の弟政知を下向させ公方にしますが、上杉方の反発で鎌倉に入れず、伊豆の堀越に移ります（堀越公方）。

関東は戦いの日々に明け暮れ、その上、低温続きで庶民は飢饉にも苦しめられます。餓死者は数知れず、と記録されています。

飢餓に苦しむ庶民は、大名の傭兵(ようへい)として戦場に行くことで切り抜けようとしました。

この時代、戦いに行けば飯が食べられ、敵地での略奪はし放題。家財道具や農作物だけでなく、人間も略奪して売ったのでした。

道灌と江戸城

道真・道灌親子は、古河公方からの防衛強化のため、長禄1年(1457)江戸城を築城。道灌が入城します。道灌３０歳の頃です。

この時代、江戸湾は入江が日比谷まで入り組んで、江戸城は海に面していました。江戸城は、上杉と公方の両軍が荒川と利根川(当時は江戸湾に流入)を挟んで対峙する境界ライン上にあり、戦闘の最前線に位置していたのです。

また江戸は、道灌の頃から物資の集まる流通の中継地として賑わう場所でもありました。

道灌の勇名をはせた景春の乱

文明5年(1473)、山内上杉家では家宰の長尾景信が急死、弟忠景が家宰になります。これを不服として、景信の嫡男景春が反旗を翻し、古河公方が彼を支援します。

道灌は関東を駆け巡り、景春方の武将を次々に撃破。5年ほど続いた戦いは決着して、道灌の名は一躍、関東中に響き渡ります。室町幕府は、文明14年(1482)、長い間対立していた古河公方を赦免、正式な公方として承認し、享徳の大乱はようやく終結します。

道灌の暗殺

扇谷上杉家に尽くした道灌ですが、文明18年(1486)、主人定正の命令で殺されます。55歳でした。暗殺者は曽我兵庫助、糟屋(かすや)の館で風呂から出たところを切りつけたといいます。道灌最期の言葉は「当家滅亡」でした。

道灌暗殺は、道真・道灌親子に擁立され、主導権を発揮できなかった定正が、新興勢力の家臣と組んで行ったものといえます。

道灌の死後、山内・扇谷の両上杉家が対立、長享の乱が始まります。関東の戦乱が最終的に収まるには、北条早雲が登場し、息子氏綱が勢力を拡大していく過程を待たなければなりませんでした。

道灌が歴史上の重要性を越えて関東の人に親しまれた理由として、尽くした主人に殺された悲劇の武将であること、子孫の1人が家康の側室（於勝の方）になり、その家康が江戸城を拠点にして支配したことが挙げられます。

［記録］文：広報部会・大野晴美
写真：同・佐藤幸彦

第19回　江戸東京博物館友の会セミナー(2004/9/19)

江戸と上方～その暮らしと文化

講師：葛西聖司さん
（ＮＨＫエグゼクティブ・アナウンサー）

言葉の違い－東と西

東京と大阪、まずは言葉の違いからお話しましょう。大阪の言葉は気取りが無く、非常に簡単明瞭です。公共の物の呼び名にも東京との違いがはっきりでています。大阪は会話の多い都市です。人同士が近くて、誰とでも話しをするということです。これは風土が育んだものでしょう。東京の下町も同じです。

関東と関西の呼び方

「関西」「関東」と言う言葉は、どちらが早かったかというと、時代的には関東です。聖武天皇(東大寺創建)の時代の記述に、関東へ行くという言葉がでてきます。当時の関東は、大宝律令で定められた関所――関ヶ原、鈴鹿、愛発(あいら）の３関より東のことです。それから４００年後、関西という言葉が記録に残っています。

「畿内」というのは中国の言葉で、帝都の中心から200キロ以内をいいます。今の京都府、大阪府、奈良県、当時の言葉で言えば、山城(山背)、大和、摂津、河内、和泉といった地域です。

ここに都ができて、帝が長く住むことになり、中心なので畿内になったのです。また、平安京が300年を迎える前に東に鎌倉が開かれました。箱根の峠（坂)より東なので坂東という言葉ができました。

文献上では、関西・関東、畿内・坂東ができた後に、室町の頃「上方」という言葉がでてきます。上方は、帝が住んでいた場所であり、神が住んでいた場所なので、東日本の人が言いだしたのです。

江戸というのは地名であり、文化の代名詞になっています。私たちの生活の多くが、江戸城の中で育まれた文化に溶け込んでいます。対して「上方」は、天子様を中心にした文化です。

江戸のシンボル・市川団十郎

上方と江戸の役者ということで、市川団十郎と坂田藤十郎を取り上げます。団十郎は現在、海老蔵襲名（しゅうめい）興行中であり、坂田藤十郎は来年中村雁治郎が襲名します。

市川団十郎家は、現在12代続いています。初代団十郎は44歳まで生きました。彼が亡くなって今年で300年です。2代目は70歳まで生きました。

彼は初代幸四郎の息子です。幸四郎家と団十郎家は親戚です。実際の子のほか養子もあって、血が全部つながっているわけではありません。7代目団十郎は、歌舞伎１８番を選定し、名優と言われた人です。非常に子だくさんで、３男と７男に７代目と８代目を継がせました。８代目は１０歳で団十郎を襲名し、その後海老蔵を名乗ります。

親孝行で美男でしたが、32歳で大阪で自殺しています。９代目団十郎は劇聖と言われ、明治時代に大活躍し、現在の歌舞伎の原型を築いた人です。

７代目、９代目親子が、がっちり組んで、現在の団十郎劇団を造り上げました。11代目の団十郎は薄幸の貴公子と言われ、襲名後３年目に亡くなりました。１２代目が現在の団十郎です。市川団十郎家は江戸のシンボリックな存在なのです。

西の文化の代表・坂田藤十郎

次は坂田藤十郎です。1647年に生まれ、1709年に亡くなりました。夕霧狂言、傾城壬生代念仏、傾城仏の原などが当たり狂言と言われています。初代藤十郎は上方で生まれ、１度も江戸にはきていませんが、歴史に名を残す名優です。傾城や廓の女に恋する男を演じて最高だったと言われています。

２代目団十郎が生まれた1688年は江戸の文化が花開く元禄時代の幕開けです。あの忠臣蔵の時代です。上方では、井原西鶴、近松門左衛門、江戸に庵を構えた松尾芭蕉も三重県の人で、西の文化の代表です。この時代に竹本義太夫という義太夫語りがいて、坂田藤十郎がいたのです。

団十郎と藤十郎

初代団十郎は藤十郎の芝居が見たくて上方まで行きます。当時、京都の劇場では藤十郎の芝居が大変な人気で、役者の格付けでは上上吉という最高の地位にいました。２人は芝居茶屋で会いました。

藤十郎と会った団十郎は「坂田藤十郎とは、すごい人間だ」と感動します。客を迎える藤十郎の態度に、その全体を見た初代団十郎が、大変感心したという記録が残っています。

じっくりと普通の会話をする芝居、物語性が好まれるなど、演劇として歌舞伎が成熟してきた頃に、藤十郎が何でもないようなしぐさや会話で客を楽しませ、終世この芸を貫いたのです。物語性を帯びた浄瑠璃、義太夫、そして、坂田藤十郎が手を結んでドラマが生まれたのです。上方が一歩先を行っていたと言えるでしょう。

２代目団十郎は、頑張ってそうしたものをどんどん取り入れ、上方と江戸の隙(すき)間を無くしていきました。２代、３代と記録にはありますが、坂田藤十郎は１代かぎりで消えてしまったのです。当代の人間国宝、70歳を越えた中村雁治郎が、京都で４代目坂田藤十郎を襲名します

大都会で花開いた文化の原点は、上方にあって、江戸、上方に関係なく取り入れられてきたのです。

[記録] 文：広報部会・岡橋園子
写真：事業部会・菅林義隆

0928-5202　　0928-5203

第２０回江戸東京博物館友の会セミナー（2004/9/28）

伊能家から見た伊能忠敬

講師：伊能洋子さん（伊能忠敬７代目洋氏夫人）

チュウケイ先生

子孫である伊能家では、伊能忠敬を敬愛をこめて「チュウケイ先生」と呼んでいます。家族はもちろん、郷土の方もこの先人を誇りに思い、大切にしてきました。私も祖母と姑（しゅうと）が遺品を守ってきた姿に触れ、自然と身近になった「チュウケイ先生」です。

すぐれた経営者

忠敬が生まれたのは上総国山辺郡小関村（現九十九里町）、やや複雑な家庭事情もあり少年期は不遇とされています。１７歳で佐原村の旧家伊能家のミチと結婚。彼女には子供がいて４歳年上でした。当主となるや傾きかけていた伊能家を再興します。すぐれた経営能力を発揮、見事成功を収めました。家業の復興だけでなく、村凶作の際は窮状を助けるなど信望も篤（あつ）い名主になりました。

名主時代は田畑測量を実際に行い、正確さと記録の重要性を痛感し、そのことが後に精密地図の原点になったのかもしれません。彼の合理的思考（このことは自筆の「家訓３カ条」にも表れている）により、商人としてまた名主として名を遂げましたが、いよいよ“理数系”に秀でた才能をさらに磨く時がきます。

伊能ウォークのこと

いま深川富岡八幡の境内に銅像が建っています。それは１０回にわたる全国測量には、必ず同社に祈願して出発したことによります。

１９９８年江戸博で「伊能忠敬展」が開かれ、その翌年には全国の海岸線を、２年間で歩くという企画が実行されました。その出発式は江戸博で行われ、ここから富岡八幡へ歩き、祈願をしてからの出発でした。

ウォークの際、長崎五島の福江で客死した副隊長格の坂部貞兵衛に因み、忠敬へあてた書簡１０通を福江市の博物館に寄贈しました。旅に病んで苦労した内容は、切々と胸を打つものがあります。福江では大変喜ばれましたが、関係者の了解をとってはあったものの佐原では残念がられました。

なお伊能ウォーク第２弾が再び計画されているようです。

恩師とお墓

４９歳で家督を譲り、念願の隠居を果たすと、江戸へ出て深川黒江町（現門前仲町）に移り住みます。幕府天文方の若きエリート科学者、高橋至時に師事、天文学や測量法を学びました。その至時への尊敬は終始変わらず、墓所も浅草源空寺にあり師の隣に眠っています。これは伊能家の宗旨とは違うお寺ですが、本人の遺志と伝えられています。

なお、忠敬の墓所はこのほか伊能家代々の佐原の観福寺にもあり、遺髪と爪が埋葬されています。さらに忠敬が一時形式的に養子になった千葉県多古町の平山家墓所にも供養墓があります。

地図づくり

最初の地図は自宅から浅草橋にある天文暦局まで、歩測練習をしながら作りました。彼の測量の動機は、元来緯度１度の長さを知りたいということでしたが、蝦夷までの第１次測量図があまりに見事だったため、幕府直轄の事業に発展してゆきます。

さらに樺太探検で有名な間宮林蔵は、忠敬の弟子に当たり、忠敬がやりのこした蝦夷の残り部分を仕上げました。

アメリカで発見された伊能大図

『大日本沿海輿地図』は彼の死から３年後に完成しました。しかし残念なことに原図は焼失したということです。ところが近年アメリカ議会図書館で写しが、ほぼ全数発見されました。さらに、それまで未確認であった最後の４枚が、最近海上保安庁の保管庫で発見されるなど、ドラマチックな経緯のすえ、全２１４枚の大図はついに復元されました。

そして釧路で初めて２１４枚全部が披露されました。１０月末名古屋ドームで、また来年１月には幕張メッセで公開される予定です。

私は先祖の足跡を辿りながら、人との出会いの大切さ、歩くことの楽しさなどを学びました。これはチュウケイ先生からの贈り物と感謝しています。

なお、このセミナーに関連して１１月１３日(土)小江戸佐原を訪ねるバスツアーがあります。ご期待ください。

[記録]文・写真：広報部会・稲垣武志

江戸東京博物館友の会　見学会（2004/9/5）

中村座などを詳しい説明付きで見学

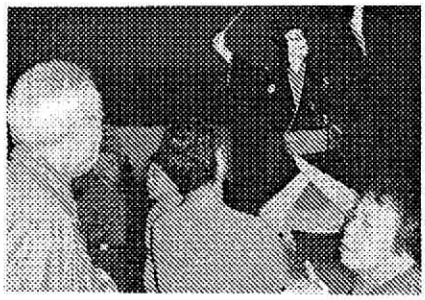
「常設展を見る～大江戸歌舞伎と能」

▲中村座の前で

常設展を歌舞伎と能という視点からじっくり見ようという見学会「常設展を見る～大江戸歌舞伎と能」が９月５日（日）行われました。

ガイドは事業部会の黒瀬雅博さんと山田英生さん。１１時、１３時、１５時の３回に分け、午後は各回をさらに２班に分けるといったきめ細かな対応で、参加者は合計４３名でした。

６階では江戸名所図屏風、江戸図屏風、明暦の大火などを、拡大した写真や資料のコピーを用意して、紙芝居風に見せながら、歌舞伎や能に関する箇所を強調しつつ解説していきました。「武士の暮らし」「出版と情報」など５階のコーナーでも、随所に歌舞伎との関連を織り交ぜた説明が続きました。「江戸の美」の小袖と浮世絵のコーナーでは「いよいよ近づいてきました」と説明者のボルテージも上がり、歌舞伎「助六」の舞台での丁寧な解説へとつながりました。



▲助六の舞台での説明

ハイライトは復元された中村座で、復元のもとになった資料のコピーも見せて、「役人替名」「絵看板」なども内容の詳しい説明がありました。そしてここで解散でした。

案内したお二人に感想を聞いたところ「意外に質問が少なかったが、何回も来ている人、歌舞伎ファンが多く説明のし甲斐があった」（黒瀬）、「小学生相手だとちっとも聞いてくれないことがあるが、今日参加の皆さんは熱心に聞いていただけてよかった」(山田さん)とのことでした。

一方参加者の声は「この博物館が開館したころ来たが、今日は久し振りで説明が聞けてよかった。特にこの間新聞で読んだ所を、現物を前にもう一度解説してもらえたのがよかった」「何回か来ているが説明を受けたのは今日が初めて。特に歌舞伎が好きなので歌舞伎関連のところを詳しく解説してもらえてよかった」「今回は特に中村座の解説が聞きたくて飛び入りで参加させてもらった。この中村座の復元は素晴らしいと思っているが、その解説が聞けて満足」などと、総じて好評でした。

［取材］文・写真：広報部会・松原良

江戸博クリップ

資料の貸し出し

学芸員　　落合則子

私は現在、学芸課資料・図書係で館蔵資料の館外貸出しを担当しています。博物館では、企画展などの際に、お互いコレクションを貸し借りして助け合っています。江戸博でもこれまで多くの館に協力させていただいています。この資料貸出しの仕事では、貸し出す資料について相手先から教わり、目を開かされることがたびたびあります。

今年の春、高輪の物流博物館で「木と竹と藁の荷造り」という企画展があり、江戸博からも木のビール箱など十数点をお貸ししました。その中に、ずっと以前に多摩の農家から寄贈された焼酎甕（かめ）がありました。

貸し出しの時、物流博の学芸員の方が、縄がかかった状態で残っている焼酎甕は大変珍しい、専門家もまずお目にかかったことがない資料だということを教えてくれました。

収蔵庫でひっそり眠っていた資料がこんなに価値があったなんて！ 今も全国の博物館では、さまざまなテーマで展覧会が開かれ、資料の貸し借りがなされています。このような交流の中から、新たな発見が生まれています。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員の方に執筆をお願いしています。

■お詫びと訂正　前21号9ページの「見学会」の記事中、「同伴者は常設展観覧料（2割引）」は誤りで、割引はありませんでした。当日ご参加の方に不快な思いをさせた点をお詫びし、訂正いたします。

～友の会会員の投稿欄～

えど友プラザ

古写真で読み解く広重の「江戸名所絵」

森　川　和　夫

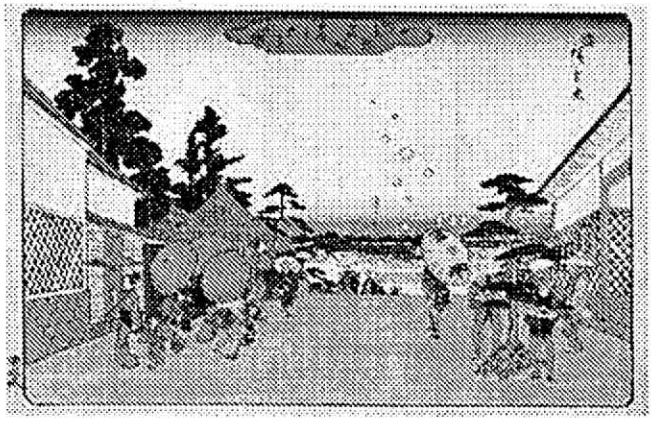
広重の江戸名所絵と、同じ場所を撮った写真とを比較する試みが時々行われていることについてはご記憶の向きも多いかと存じます。その最も古いものは、大正８年に刊行された「今昔対照江戸百景」ではないかと思います。広重の江戸名所絵と掲載された写真を一枚一枚見比べてみると、大正８年の時点で、すでに江戸の風景は一変し、広重の名所絵を髣髴（ほうふつ）させる写真がほとんどないのはまことに残念なことです。

そこで、私は広重の江戸名所と、同じ場所を撮った幕末・明治初期の写真とを対照させる試みを始めました。幕末・明治初期というと、広重の時代から１０年か２０年しか経っていませんので、広重の江戸名所絵を髣髴させる写真が多く、広重の絵を見ていただけでは見えてこないものが見えてくることもあります。

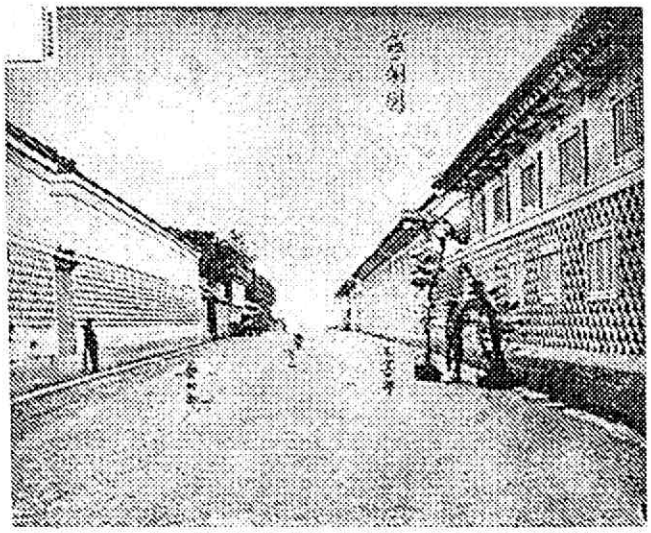
例えば、広重の絵は絵空事が多いといわれていますが、どの程度実景がデフォルメされているのか。また、広重の絵はおしなべてあっさりとこぎれいに描かれていますが、江戸の実際はどうだったのか。このような疑問にこたえるには写真と比較するのが一番です。写真は瞬時に我々を１３０年位前の江戸や東京の生々しい現実に引き戻してくれます。このような生々しい写真の現実と、様式性の強い広重の江戸名所絵を比較し、写真の現実から様式化された浮世絵へ、また、浮世絵から写真へと行き来するのも広重と古写真を比較する醍醐（だいご）味のひとつといえましょう。

広重の江戸名所絵と古写真の比較を始めたのはほぼ一年前でした。初めは、50 位を目標にしていたのですが、その後、だんだん増え今では 150 を超えました。そこで、自分のホームページを立ち上げ、この広重の江戸名所絵と古写真の比較をアップロードしました。ここでは、明治初年に撮影された霞ヶ関の写真と広重の浮世絵を参考までにご覧いただきたいと思います。

さらにご興味がおありの方は、私のホームページ（※）でご検索いただくか、例えば、Google で、「Kazuo Morikawa Website」または「森川和夫」を検索されてもご覧になれます。



▲東都名所霞かせきの図（広重江戸風景版画大聚成＝小学館）



▲江戸城霞ヶ関（東京国立博物館所蔵＝幕末明治写真資料目録）

私の江戸名所の研究はまだまだ始まったばかりで、「えど友」の諸兄姉よりご指摘やご教示をたまわり、研究をさらに深めてゆければと思っております。

※http://homepage3.nifty.com/morikawa_works/hiroshige.html

博物館のつもりで古い家を料理屋に

小　林　玖　仁　男

昔の日本家屋はきちんと手入れさえしていれば 100 年 200 年と持ちます。しかし人の寿命がそれより短く、世帯主としてその家を所有する時間はさらに短く、おおよそ３０年に一度は相続が発生。古い建物は、相続によるいろいろの環境の変化で、その度に建て替えや売却の危険にさらされます。一つに税金対策。一つに新世帯主の生活様式の変化。ここ５０年それが繰り返され、日本の景観はかくも汚くなりました。

私どもの家は昭和１２年の祖父の建物。政治家（参議院議員）だった祖父が、人寄せ用につくった敷地４００坪、建坪１２０坪（平屋）の屋敷です。その後、父、私と２度

の相続がありました。普通でしたらこの間に、相続税対策として、４００坪はマンションに様変わりするというのが世の常です。

老朽化した平屋の１２０坪に住むということは、税金面以外にも大変なことです。雨戸の開け閉めだけで一苦労。隙間だらけの木造建築を全館冷暖房にするのにも莫大な光熱費。畳と押入れと床の間で構成された同じような部屋。連なるこれらの部屋は、普通は居間に寝室に子供部屋にと、洋風に改造せずには暮らせません。

「これをこのままの形で維持管理するには、料理屋しか道はない」。これが私の決断でした。時は平成９年、バブルがはじけ不景気は進行中でした。次々と老舗の料亭が店を閉めていました。

素人の私が料理屋をやる。その噂を聞きつけ、周りの誰もが反対しました。すべては見識と愛情ある正論です。その中でただ一人応援してくれる方がいました。

その方は、「たぶん今の時代、料理屋の経営は難しいと思う。しかしあきらめると、あなたの人生後悔が残ると思う。失敗したら、この家は最初からなかったと思えばいいのだから、やってみれば…」。大変無茶なアドバイスです。しかし、私はこのアドバイスを踏み台に決心を固めました。そして平成１０年、二木屋の屋号で料理屋を開店。今年の１０月で満６年になります。この６年間の話は、小説になるくらい、山あり谷ありでしたが、ここでなぜ成功したかをかいつまんでまとめてみます。

一つは希少価値です。みんなが古い家や庭を放棄した中で、この家には懐かしい昔の暮らしが残っています。お客様の共通の感想は「懐かしい」という言葉。昔の記憶の中に、この家のような佇(たたず)まいが残っているのです。どこにもないから、あったとしても京都まで行かないとないから、二木屋の存在価値が輝いたのでした。

二つに女性の支持でした。この不景気にお金を使っていただけるのは５０代、６０代の女性だけです。このお金と時間のあるお客様が二木屋を愛してくださいました。昼のお客様は100%女性といっても過言ではありません。女性のお客様が、料理と庭や建物や調度品を楽しみ、口コミで広めてくださいました。和の懐かしい文化は、女性好みのトレンドでもあったわけです。

三つ目に、建物と料理だけでなく室礼（しつらい）にも力を入れたことが評判を呼びました。室礼とは、昔からの日本の伝統行事や歳時などの年中行事を部屋にしつらえることです。お正月飾り、お雛様、端午、七夕、お月見など、古式ゆかしい本物の日本文化を毎月しつらえていきました。この伝統文化を守るのは、マンションでは難しく、昔の日本家屋にしか似合いません。だから室礼文化の継承こそ二木屋の仕事と決め、それこそ博物館運営のつもりで力を注いでまいりました。

懐かしい日本家屋の舞台で、本物の住文化と食文化をつくり守っていったのが、ご支持いただけた理由だと思います。一昨年秋にはこの家は政治家の屋敷の遺構として国の有形文化財に登録されました。

秋になると、庭に能舞台を組み、薪能を催します。すべてのガラス戸を外し、昔の武家屋敷のような佇まいの中、たった６０人のお客様を迎えての能は、年々話題になり、私どものメインの催しに成長しました。

これからも、この懐かしい家を劇場に見立て、日本文化の粋を集めて運営していきたいと思います。そして私の培いました僅かな知恵ではございますが、古い屋敷を壊さずご商売を考える方のお役にも立っていきたいと思っております。

「逆井」という地名について

桐　井　聡　男

私が住んでいる江戸川区の江東区寄りに「逆井」（さかさい）という地名が、昭和47年までありました。今はこの逆井という地名は、一部は小松川、一部は平井という地名になり、ただ旧千葉街道に架けられた橋の名とか、地元の保育園に辛うじてその名を留めています。

えど友サークル　メンバー募集中！

落語・講談を楽しむ会

◆趣旨　落語や講談の話の中より題材を取り、当時の生活習慣・文化・風習を勉強し、史跡を訪ね、理解を深めた上で、落語・講談を聞きたいと思っています。

◆発起人（世話人）　鈴木秀明さん

なお、「江戸の理解を深める会」「江戸三十六見付を巡る会」も引き続きメンバーを募集しています。

●サークルへの参加をご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名、④住所、⑤電話番号、⑥Eメールアドレスをご記入の上、友の会事務局へお申込みください。多数の方のご応募をお待ちしています。

申込先　130-0015 東京都墨田区横網 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
Tel.０３－３６２６－９９１０

●新規サークルを設立される方も引き続き募集中です。ご希望の方は事務局(上記)へ関係資料をご請求ください。

この逆井という地名はどのようないわれでつけられた地名でしょうか。地元の『江戸川区史（通史編）』によると、低湿地なので満潮の折には水流が逆流する所、井は泉（湧き出る水）と同意とされています。

はたして、そのような理由から逆井という地名がつけられたのでしょうか。次のような疑問が浮上してきます。

1）一般に「好字」の例から見て「逆」という字は適当であったでしょうか。

2）潮の関係であるなら全国のあらゆる所にある筈です。

3）この地は旧千葉街道沿いということもあり、川をはさんだ争いごとが絶えなかったところです。

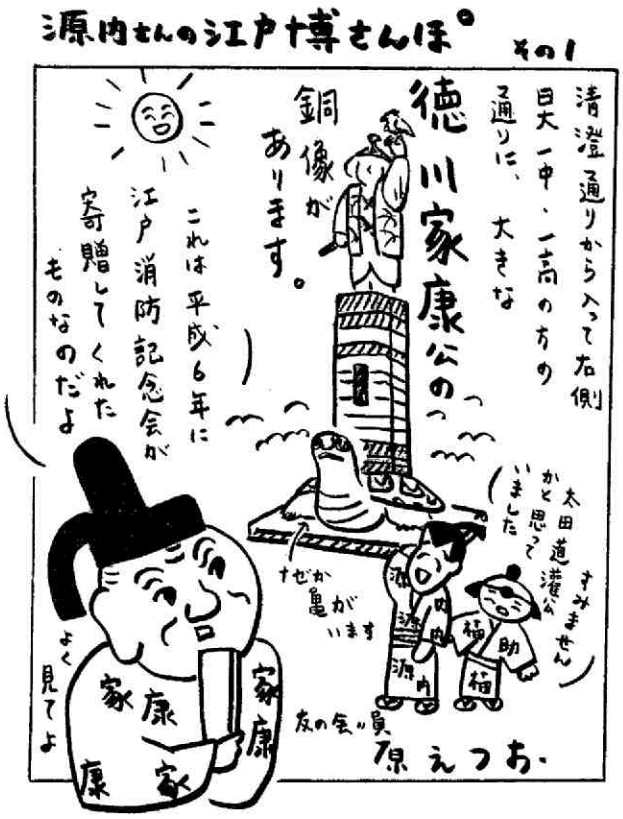
確かに現在長さ約６０m、幅約８m程の橋の上に立ってみると、東京湾の潮に関係する流れがあり、逆流することも多い。これは関東近県の河川では同じ現象が見られるし、次に「好字」の例から見て逆のつく人名は、旗本として逆井播磨がその居住地として茨城県猿島に逆井遺跡として残っています。争いごとは、江戸川区と江東区を結ぶ旧中川に「渡し」があり、明治１２年、小松川村と亀戸村とによって木橋が創架され、「渡し」の使用は終了しましたが、その渡し賃をいくらにするかということで、小松川村には村を分割するような争いがあったと聞いております。この旧千葉街道付近には、小松川神社、浅間神社があり、俳人松尾芭蕉の句「秋に添うてゆかばや末は小松川」、小林一茶の「かじの音は耳を離れず星今宵」の句碑が建立されています。

また、柳田国男の有名な「掛神について」の中で、サカサイは外敵防御の神であり、境道祖（サカサイ）にして境上の鎮防神であるとの説を、埼玉の坂戸、あるいは群馬の坂斎藤を例にとられて、村の境の義とされています。

柳田翁は、たびたび墨東の地に足を運び、また自身の青年期には柏市近くに居を構え、実際に見分されたことも資料から見ることができます。もし境道祖ならばもっと多くの地名に「サカ」「サカド」の数は残っていなければならないと思います。（千葉県君津の坂戸市場の人身御供があります）。

そこで、私は次のような仮説を提供しようと思います。「サカサイ」を「サ・カサイ」と区別してみたらどうなるのでしょうか。「サ」は一般的には「幼い・可愛い」という意味のほかに「小さい」という意味も含まれています。「サミダレ」「サオトメ」あるいは地名では「佐渡」「佐倉」。ひとつの接頭語と解されます。

次に「カサイ」という意味は葛西と解され、すでに江戸川区葛西という地名があります。これは平家の流れの葛西氏からのもので、葛西氏はその祖を平良文とされ、武蔵国豊島郡、下総国埴生郡、同じく葛西郡を治安３年（1023）に安堵されたといいます。その先祖は別として、



葛西中興の柱とされる葛西清重から約400年、第17代葛西晴信まで、時にその盛を誇り、時には滅する間に、仙台伊達正宗からの葛西氏残党の圧迫掃討によって、離散する命運になったのです。晴信はその居を千葉県印旛郡とされているが、この地は葛西郡に接しており、この地は伊勢大神宮に献上されている地であって、印旛にその本拠があったという説には賛成できません。

晴信は東北黒川郷大谷荘を秀吉より賜り、大日本史によれば岩手磐井郡の内に葛西の荘があり、今の「沙子」「田村」「千厩」の南とあり、埼玉秩父から武蔵へ、そして東北へと活動し、それに伴ってその範囲を広めていったのでしょう。そして葛西の家臣、その一族も四散し、主家の安泰を願い、諸方に散ったものと思われます。葛西という名による圧力から「サ」の字を使ったのではないでしょうか。

千葉県柏市にも逆井という地名があります。ここも大津川の近くであり、葛西一族が安堵した土地は下総国埴生郡であれば、その一族が残っていたとしてもふしぎではありません。茨城県猿島町にもかつて逆井村があり、近くの山村と合併し、現在は猿島町となっています。これも近くの西仁連川が逆流したとの解釈ですが、かつて猿島自体、下総国辛島と称された所であって、一族の由来の地と思われます。

要するに、山あいの谷深い所を平家のかくれ谷と呼ばれているように、地名から人名へ、再び地名へ隠れてきたのではないでしょうか。

江戸東京博物館ミュージアムショップ　名店めぐり⑭

上品でヘルシーな野菜菓子「梅鉢屋」

小型の箱の中に、大根・人参・レンコン、牛蒡（ごぼう）・夏みかん・昆布などの砂糖漬けが彩り良く並んでいるお菓子を見つけて買ってみました。江戸博ミュージアムショップでは、こんな懐かしくて、珍しい物を見つけることができます。

さっそく、製造元の「梅鉢屋」さん（墨田区八広2-37-8　電話3617-2372）を訪ねて、お店の歴史と作り方を伺いました。

「野菜の砂糖漬けという技術は江戸時代からありました」と、社長の丸山壮伊知さん。祖父は菓子屋の息子さんで、明治40年頃、人形町の菓子屋さんに丁稚奉公に入り、砂糖漬けの作り方を学び、大正4年に独立。向島に店を構えられたといわれますから、現在で3代目になります。

野菜は市場で仕入れた物と産地から直接入ってくる物との両方を使っています。仕入れ後は、丸山さん1人の作業になります。

包丁での手切り、お湯でゆで、柔らかくなったところで引き上げ、砂糖を溶かした糖蜜で煮ます。すべて種類別です。

野菜の中の水分と砂糖の入れ替わりが急激だと色が悪くなったり、縮んだり割れたりする障害が起こるので、ゆっくりとゆで上げるのがコツとか。

火にかけっぱなしではなく、1日かけて野菜の水分で少し糖度を薄め、水分が蒸発したところで砂糖を投入して少し濃度が上がったら火を止めて1日寝かし、翌日また火にかけるという作業を繰り返します。この手順は、野菜によって異なり、大根などはできあがりに5、6日かかるそうです。

夏みかんは皮の上にかぶさった油を含んだ薄皮をはがすので、より大変な作業です。

作業場には、なんと直径54センチの大鍋が並んでいました。これらの作業は、箱詰めを除いてすべて丸山さんの仕事です。戦後から高度経済成長期までは、二代目が始めた甘納豆が時代の波に乗って非常に売れました。

その後、甘い物の人気が下火になったので、本来の野菜の砂糖漬けに力を入れるようになりましたが、甘納豆は今も作っています。砂糖は頭の働きが良くなる効果があるといわれ、野菜はヘルシーです。一度召し上がってみてはいかがでしょうか。

［取材］文：広報部会・岡橋園子
写真：同・佐藤幸彦

会議・会合日誌

2004／8／1～2004／9／30

◆役員会

・8月12日（木）18時から開催。各部会報告のほか、事業活動の今後の活発化を踏まえ、友の会として博物館に要望したい事項、すなわち友の会専用スペースの確保などについて話し合った。出席12名。

・9月9日（木）18時から開催。来期の役員選出に関し、「役員等候補者推薦委員会規則」案を審議し承認した。これにともない各部会から3名の委員を選出することとした。

また、ホームページ再開への進捗状況、えど友サークルの応募状況などの報告があった。出席10名。

◆事業部会

・8月5日（木）18時から開催。館外見学会用のハンドマイクの新規手配、腕章の追加手配などについて報告があり、8月のセミナーへの対応、9～10月の予定、担当者の確認などを行った。出席21名。

・9月2日（木）18時から開催。8月セミナーの報告のほか、9月の見学会（常設展）、セミナー（19日、28日）への対応、10月～11月事業の確認、担当の決定、12月以降の計画についての話し合いなどを行った。出席17名。

◆広報部会

・8月11日（水）16時から開催。ホームページの内容構成について検討し、その骨格を決めた。

また「えど友」第21号についての総括、第22号の内容と分担などを話し合った。出席9名。

・9月16日（木）16時から開催。「えど友」への広告掲載の是非、友の会PR用パンフレット内容などを話し合った。ホームページについては各構成内容の定義・運用ルールを決め、早期再開を目指すこととした。

このほか、「えど友」第22号の内容・担当などを確認した。出席6名。

◆総務部会

・8月25日（水）13時から「えど友21号」などの発送作業を行った。出席13名。

事業部会だより

★☆★講座のお申込方法★☆★

◆普通はがきに、①講座名・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）、④〒住所、⑤電話番号を明記して、右記の「友の会事務局」へ。
◆締め切り：各講座の案内をご覧ください（必着）。

◆お申込みは、各講座ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
◆申込み先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、折り返し「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込みをしてからご参加ください。

友の会セミナー

第23回「昭和天皇の料理人」

講師：谷部金次郎さん（大阪青山短大特別講師）
・開催日：11月3日（水・祝）14:00～15:30
・お申込は締め切りました。
・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：１００名　同伴者可（ハガキに氏名連記）
・参加費：会員２００円、同伴者５００円（当日払い）
◆「天皇の料理番」のモデルになった秋山徳蔵氏の弟子として、和食を専門とし、昭和天皇、香淳皇后の日常の食事をはじめ、新年祝賀の儀や園遊会などの皇室行事に伴う宮中料理を調理した当時のことなどをお話いただきます。

講師略歴：やべ・きんじろう
昭和３９年宮内庁に入庁、大膳課に配属。昭和天皇崩御を契機に退職。現在、大阪青山短大特別講師、くらしき作陽大学非常勤講師、（財）佐倉ゆうゆうの里食事顧問。著書に「昭和天皇と鰻茶漬」（文芸春秋）など。

［企画担当責任者］　大倉和寿（事業部会）

特別内覧会

企画展「大（Ｏｈ！）水木しげる」展

・開催日：11月5日(金)18:00(受付開始17:30)
・お申込は締切りました。
・会場：江戸東京博物館・1階会議室／企画展示室
・定員：１００名　同伴者可（ハガキに氏名連記）
・参加費：会員、同伴者とも５００円（当日払い）
◆「ゲゲゲの鬼太郎」で知られる漫画家水木しげる氏の５０年以上に及ぶ画業を、原画、紙芝居、貸本などから振り返り、「妖怪研究家」としても名高い氏が世界中から集めた民族資料や、妖怪が描かれた古い図鑑や絵巻物も公開し、「水木しげるワールド」のすべてを見せる「大（Ｏｈ！）水木しげる」展です。

［友の会側責任者］　岩松精（事業部会）

友の会セミナー

第24回「江戸／東京の狛犬あれこれ」

講師：三宅稜威夫さん（日本参道狛犬研究会代表幹事）
・開催日：11月11日（木）14:00～15:30
・申込締切：11月2日（火）必着
・会場：江戸東京博物館・1階学習室１・２
・定員：１００名　同伴者可（ハガキに氏名連記）
・参加費：会員２００円、同伴者５００円（当日払い）
◆普段ほとんど注意を払わず見過ごしている狛犬、その背後には地域や職人（石工）、文化の伝播などの歴史が秘められています。いろいろの狛犬を事例に、狛犬の歴史や魅力などを楽しく語っていただきます。

講師略歴：みやけ・いづお
1938年長野県生まれ。市民文化センター代表。埼玉県落語振興会会長。ＮＨＫラジオ深夜便「東京ぶらり旅」に定期出演。

［企画担当責任者］松原良（事業部会）

見学会（バスツアー）

北総探訪―成田不動と小江戸佐原と伊能忠敬

・開催日：１１月13日（土）8:30～（集合8:15）
・お申込は締切りました。
・コース：江戸東京博物館（集合）－成田山新勝寺―旅の駅米屋観光センター（昼食）－佐原市―佐原山車会館―伊能忠敬記念館―伊能忠敬生家跡―佐原の町並み散策―（香取神社）―江戸東京博物館
・定員：１２５名（バス３台）
・参加費：会員５０００円（昼食付き、当日払い）
同伴者６０００円（昼食付き、当日払い）
◆９月に開催された友の会セミナー「伊能家から見た伊能忠敬」に関連して、小江戸の一つとして知られている千葉県佐原市を訪れ、魅力ある古い町並みと伊能忠敬記念館を中心に見学します。

［企画担当責任者］岩松精（事業部会）

古文書講座

第３期を１月から開講、申込み受付中

古文書講座の今年度第３期を１７年１月から開講します。第３期も第２期と同様、**「入門編」、「初級編（１）」、「初級編（２）」の３講座**です。ぜひご参加ください。

ただし、「初級編（１）」と「初級編（２）」はほぼ同レベルですので、**初級編への申込はどちらか１講座のみ**とさせていただきます。なお、「入門編」と「初級編」のいずれかとの同時受講は差し支えありません。

◆すでに第２期を受講されている方は、特に不参加のお申出がない限り自動継続となり、お申込みの必要はありませんが、別の講座を希望される場合は改めてお申込みが必要です。

◇第３期の日程

＊入門編　第１回 1月 12日（水）
　　第２回 2月 9日（水）
　　第３回 3月 9日（水）

＊初級編(１) 第１回 1月 26日（水）
　　第２回 2月 23日（水）
　　第３回 3月 23日（水）

＊初級編(２) 第１回 1月 15日（土）
　　第２回 2月 19日（土）
　　第３回 3月 19日（土）

・開催時間：すべて 14:00~16:00
・会場：江戸博１階会議室
・講師：野尻泰弘さん(学習院大学大学院史学専攻)、小宮山敏和さん(同)、小松賢司さん(同)が交互に担当。
・参加費：全３回１０００円(各講座とも初回払い)
・定員：８０名（各講座とも）
・新規申込締切：各講座とも 12月 25日（土）必着

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

◇第２期・今後の日程（すべて申込締切済）

・入門編・第２回　11月 10日（水）
　　第３回　12月 8日（水）
・初級編（１）・第２回　11月 24日（水）
　　第３回　12月 22日（水）
・初級編（２）・第２回　12月 4日（土）
　　第３回　12月 18日（土）

［企画担当責任者］ 山口千恵子（事業部会）

友の会セミナー

第２５回「放鷹文化の再考」

講師　田籠善次郎さん（日本放鷹協会会長）

・開催日：12月 5日（日）14:00～15:30
・申込締切：11月 24日（水）必着
・会場：江戸東京博物館・１階会議室
・定員：１００名　同伴者可（ハガキに氏名連記）
・参加費：会員２００円、同伴者５００円（当日払い）

◆４０００年以上前、中央アジアで発祥したとされる鷹狩は世界中に広がり、日本では１６００年以上の歴史を持つ伝統文化です。今回のセミナーでは日本の鷹狩・鷹匠の技術がどのように継承されてきたのか、世界との違いや共通点をお話していただき、放鷹文化理解の一助としていただくと共に、この文化を将来に伝えるため、健康的な社会生活を継続するための課題として「里山や御鷹場の大切さ」についても皆さんに考えていただきます。

講師略歴：たごもり・ぜんじろう

昭和２２年生まれ。造園家。昭和４５年頃から鷹の飼育、調教を始める。伝統ある日本の鷹狩文化の保存と継承を柱に活動している日本放鷹協会会長。

［企画担当責任者］黒瀬雅博（事業部会）

友の会セミナー

第 26 回「八百善の四季“冬の味覚とおせち料理”」

講師　栗山善四郎さん（八百善十代目当主）

・開催日：12月 12日（日）11:30～13:00
・申込締切：11月 30日（火）必着
・会場：江戸東京博物館・１階会議室
・定員：８０名　同伴者可（ハガキに氏名連記）
・参加費：会員、同伴者とも４０００円（当日払い）
・ご注意：特別料理を用意のため、キャンセルがないようにお願いします。

◆享保２年に開業以来、徳川将軍家代々の御成りを仰ぎ、黒船で来航したペリー提督への饗応料理も担った江戸料理の老舗料亭「割烹家八百善」。その様子は葛飾北斎、五渡亭国貞などの浮世絵や蜀山人の狂歌として現存しています。また森鴎外や永井荷風、菊地寛などの文化人をはじめ、多くの財界人も訪れています。その八百善当主の指導・監修による「おせち料理」を当主の解説を聞き、賞味します。

講師略歴：くりやま・ぜんしろう

八百善十代目当主。食の研究家。９代目との共著「江戸のおそうざい」、自著「四季の魚料理」「四季の味ごよみ」などがある。平成１６年３月放映のＮＨＫ月曜ドラマ「菊亭　八百善の人々」では、料理指導、江戸料理監修をつとめた。フジテレビ「郁恵・井森のデリ×デリキッチン」にレギュラー出演。

［企画担当責任者］大倉和寿（事業部会）

雨で中止の「相撲史跡探訪」は 12月11日(土)に行います

台風２２号のため、去る１０月９日の見学会「相撲史跡探訪　その１」は中止させていただきましたが、来る１２月１１日(土)に改めて実施することになりました。参加ご希望の方は改めて申込をしてください。

申込締切は１１月３０日（火）です。

なお、集合場所、見学コース、参加費などは変わりませんので、詳しくは前号１０頁をご覧ください。

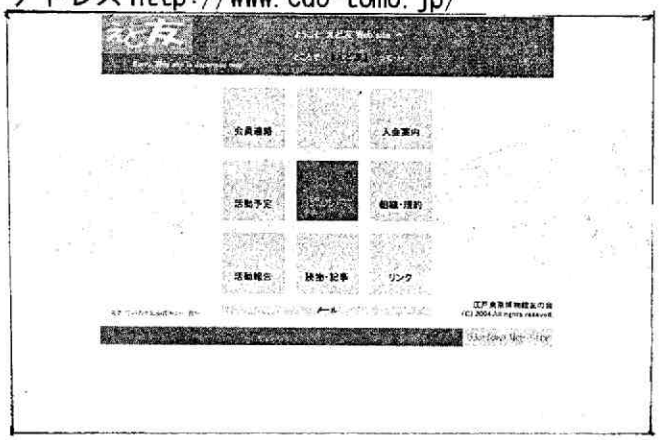
会計事務の協力者募集！

先に友の会・会計事務作業に協力していただける方を募集し、すでに１名の方からお申出をいただきましたが、さらに１～２名の方にご協力をお願いしたく、再度募集いたします。

▲作業日時　毎月第２木曜日　午後２時～４時
▲作業場所　友の会事務室（博物館事務棟地下１階）
▲作業内容　伝票の整理、会計の計算事務など
　会計上の最終処理は会計担当役員が行いますので、そのお手伝いをしていただくことになります。
▲募集人員　１～２名
▲ご協力いただける方は下記までご連絡ください。
　会計担当役員　菅林義隆　０３－３３３２－０２６９
　　藤永昭彦　０３－３３３３－６９９１

友の会ホームページ <えど友>Web版　再開

友の会ホームページ<えど友>Ｗｅｂ版はしばらく休止していましたが、１１月より再開しました。
ドメイン名は従来と変わりありません。
再開にあたり、サイトの構成を一新しました。ご意見、ご感想をお寄せください。
アドレス http://www.edo-tomo.jp/



ご投稿を歓迎!　自由なテーマで、お気軽に

会員の皆さまからのご投稿をお待ちしています。
✤ご応募は、①お名前、②〒住所、③会員番号、④電話番号を明記の上、⑤できれば顔写真を添えて、友の会事務局まで。　採用分には記念品進呈。

会員優待のお知らせ

企画展「大（Ｏｈ！）水木しげる」展

会期　2004年11月6日(土)～2005年1月10日(月・祝)　　休館日：年末年始(12/27～1/4)、月曜日(１月10日は開館)
図録　定価:２０００円　[前号で今回の図録は「会員10%割引」とお知らせしましたが、会員割引はありません。お詫びして訂正いたします]。
会　員：一般５５０円、６５歳以上２７０円、大専門生４４０円
同行者：一般８８０円、６５歳以上４４０円、大専門生７００円

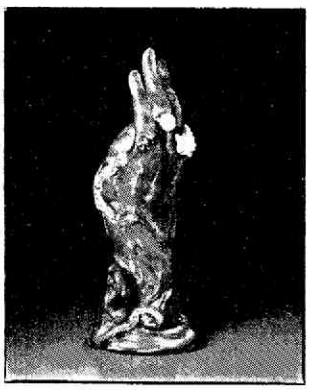
・次回企画展予告・

フランスの至宝

「エミール・ガレ」展

会期　2005年1月22日(土)～4月3日(日)

月曜休館(月曜が祝日の場合は開館・翌日休館)



《手》1904年　オルセー美術館所蔵
©photo RMN-H.Lewandowski

江戸東京博物館友の会
会報〈えど友〉第22号
2004(平成16)年11月1日発行
隔月(奇数月)刊。次号は１月１日発行予定

編集・制作／友の会広報部会
東京都墨田区横網1-4-1
〒130-0015　電話03-3626-9910
発行人：大松駿一(副会長)　編集主幹：松原良
編集人：菅沼和男、岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美
小柳英二郎、斎藤美香子、稲垣武志、岡田守弘